

誇りを持って！ 聖職者たれ！！

「職業」には、期待されているもの、求められているものがある。産経新聞のコラムを読んでいて、そんなことを改めて考えさせられました。

例えば、修道士や修道女、警察官や消防士、なんとなくイメージを持っています。コラムにある「他人とは違う高貴な仕事」「高貴な生き方」と言う表現にはハッとさせられました。

警察官になる人は「命や財産を守るべき職業」という職業観は誰もが持っていると思いますが、「高貴な仕事」という自覚は人それぞれのような気がします。

単なる労働者として

「命や財産を守る職業」に就いている警察官と、「高貴な仕事」の自覚を持って命や財産を守っている警察官とでは、天地の違いがあるはずです。しかし、この両者には、身分も、階級も、給料も、仕事内容も、外見上はまったく同じかも知れません。

私たちが、警察官や消防士に「自分の命を顧みず、他人の命を助ける」くらいのイメージを持っても、当人は、そんなことを求められたら…、なのでしょう。

私たち教師の仕事も同じです。「他人とは違う高貴な仕事についている自覚さえあれば、旅行の方を先送りすることなど簡単だった」という言葉が胸に突き刺さります。

はたして、私たちは、それほどの自覚と覚悟を持った教師であるだろうか。教師の仕事は、際限が無く、実質の勤務時間も長いし、仕事を家に持って帰ることも日常だろうと思います。どこまでやればいいのか。どこまでやる必要があるのか。日々、自問自答していることと思います。しかし、もし、「簡単だった」といえる境地に立てれば、そんなことを自問自答したり、悩んだりすることなくなるのでしょうか。

さて、教師という職業は、いったい何を期待され、何を求められているのでしょうか。このコラムを読んで、できれば、それ以上の自覚と誇りも持って、この職業をまっとうしたいなと、強く思いました。そういう生き方こそ、人として生きる道だと私は思います。

産経抄
曾野綾子さんが一昨日の1面コラム「小さな親切、大きなお世話」で、カトリックの修道院について書いておられた。かつては「自由がなく、この世の快楽や便利とはおよそ無縁の生き方を選ぶ場所」だった。それでもそこに暮らす人は「充実感をもって生きていた」という。▼ところが第2バチカン公会議以来「開かれた教会」が叫ばれてきた。その結果修道院も厳しい規則が取り除かれるようになり、個人の希望もかなえられる所が増えた。するとその頃から修道士や修道女を志願する人が減ってきたのだそうだ。▼目から鱗の思いがした。修道士も修道女も、俗世界の欲求を断ち神からの使命に従ったからこそ、高貴な生き方として尊敬を集めた。それが俗世界と変わらない生活をし、欲求も入れられるようになっては、もう憧れの対象ではなくなりつつあるらしい。▼現代の日本では自衛隊や警察、消防などがそれに近い存在といえる。修道院ほどではなくとも規則を重んじる。個人の欲求もある程度制限し、公共のために生きるからである。実際、大震災でのわが身の危険を顧みない活動は、日本中から尊敬の目で見られたはずだ。▼そんな視線をみごと裏切ったのが長崎のストーカー事件での千葉県警の対応だ。女性から相談を受けた習志野署の警察官が被害届の受理を先送りし、その間に他の署員らと北海道旅行をしていた。職務よりも自らの欲求を優先させたと思われる。▼他人とは違う高貴な仕事についている自覚さえあれば、旅行の方を先送りすることなど簡単だった。被害者らの怒りは当然だろう。同時に、命や財産を守るべき職業が国民に失望感を抱かせた罪はまことに大きい。

2012. 3. 25

1年間お疲れ様でした。新しいスタートを！